

大通公園を望む窓辺から

たばこ

会長 長瀬 清

2020年の東京オリンピック・パラリンピックまであとわずかに迫っています。国際的なスポーツ大会では禁煙は常識的になっています。東京でも都および医師会は懸命に禁煙、受動喫煙防止に取り組んでいます。

禁煙運動の歴史は、古くは明治33年未成年者喫煙禁止法制定に始まり現在に続いています。昭和52年には、日本で初めて札幌に「非喫煙者を守る会」が発足。肺結核に代わって、昭和56年がんが死亡の第1位に躍り出ました。以来がんの罹患数、死亡数はうなぎのぼりに増加しています。原因としてはいろいろ言われていますが、胃がん、子宮頸がん、肝がんのような細菌やウイルスによるもののほか、たばこや化学物質等有力な発がん物質が挙げられています。がんでは予防が大切です。二次予防（検診で早期発見・治療）、一次予防（がん発生防止）の大切さは全ての人十分認識していますが、悲しいかな思うようには効果を上げていません。たばこの害については、明明白白ですが、捨て去ることが出来ないヒトが多いのも現実です。北海道は、男女とも肺がんの罹患率死亡率は、全国でトップを争う位置にあり、原因と考えられるたばこに関して、喫煙率が高く、特に女性はダントツというのは恥ずかしい限りです。北海道医師会では、平成15年健康増進法施行に合わせ、「禁煙宣言」を発しました。

本来は時間がかかっても禁煙とすべきですが、まずは受動喫煙防止をと数年前から懸命に取り組んでいます、なかなか実を挙げられません。

国に先んじて受動喫煙防止条例をと、議会に働きかけを行いました、一部議員の反対で実現に至りませんでした。改正健康増進法が7月1日から一部施行され行政機関等で敷地内原則禁煙となります。

来年6月に落成を見る、道議会の中に、受動喫煙を防止するために、喫煙所を設置するという案が出ています。公的施設に喫煙所を、国民の税金を使って設置することは許せないと思っています。受動喫煙を防止するためというのは詭弁です。設置は是非止めて欲しいものです。



買書

理事 松家 治道

またぞろ、「大通公園を望む窓辺から」の執筆依頼が来てしまいました。筆の遅い自分としては、なんとか避けたいと思っておりますが、ここは「よろこんで」と書くこととします。

私の前任者は非常な読書家で、札幌市医師会にも多数の本を寄贈くださりました。私もあやかって読書をせんと志したものの、書店に行く時間のなさを言い訳とする日々でした。そこで思いついたのが、日曜の読売新聞「本、よみうり堂」という書評面の利用です。

ちなみに私たち夫婦は熱烈な巨人軍のファンで、日々読売と報知を開いては一喜一憂しております。

閑話休題。書評面には、広い分野の本について、様々な方の書評が載っており、それを読むだけでも十分面白いほどですが、特に気になったものがあれば、そのまま紙面をスマホに撮って、翌日アマゾンで購入しております。そうした中から、最近面白かったものを、いくつか紹介させていただいて、責を果たしたいと思えます。

まず、『南スーダンに平和をつくる（紀谷昌彦）』です。現地で平和のために努力された官民の活動を記したもので、その「オールジャパン」の活躍には胸を打たれます。一方で、派遣された自衛隊に、邦人保護の任務や権限が与えられていなかったということに驚かされました。

次に、『すっきり中国論 スジの日本、量の中国（田中信彦）』です。「量」を価値観の中心に据える大陸の人々と、「スジ」にこだわる日本人との対比を、分かりやすく解説されております。

また、『日米開戦と情報戦（森山優）』では、開戦に至る意思決定の過程が詳説されています。曖昧な「国策」を軍部や政治家が迷走させる中、昭和天皇が一番まともな政治感覚を持っていたのではと思わせられました。

この方法は、買いすぎてしまい、学生時代から変わらぬ「つん読」になりがちです。そのため表題を読書ではなく買書とした次第です。